

令和7年度 杉並区立杉並第二小学校 経営・評価計画 「自己評価報告書」・「学校関係者評価報告書」		校長 新井 晶子		学校関係者評価委員会委員		
目標体系		目標体系		学校関係者評価委員会委員		
杉並区の教育ビジョン	「みんなのしあわせを創る 杉並の教育」 ◇学び合い、信頼をつくり、共に生きる ◇ちがいを認め合い、自分らしく生きる ◇誰もが社会の創り手として生きる			委員 中島 豊(CS) 荻上 健太郎(CS) 中島 健(CS) 石原 誠(CS) 中原 隆友(CS) 後藤 円(CS) 橋谷 千恵(CS) 石渡 洋元(CS) 嶋山 優子(CS) 桐村 裕子(CS) 横倉 秀明(CS)		
学校の教育目標	『やさしくなる しあわせになる』			評価		
経営目標	「未来の自分に誇れる自分になる 未来の杉二小に誇れる杉に小を創る」			5 優れている		
目指す学校像	○児童が学ぶ楽しさや人とかかわる喜びが得られる学校 ○地域・保護者が学校と相互にパートナーとなり児童を育てる学校 ○教職員が学びを支援する伴走者として日々成長できる学校			4 良い		
目指す児童像	○自分を啓き、生涯自立した学習者をめざす ○自他を尊重し、助け合い認め合う集団の一員として誇りをもつ子			3 普通		
目指す教師像	○チーム担任の一員として全て児童の担任という意識で指導にあたる教師 ○確固たる授業力を身に付けると共に、切磋琢磨する組織の中で力を発揮する教師 ○事故・事件・保護者対応は初期対応を最重視し、組織として迅速・的確に進める教師			2 もう少し 1 悪い		
令和7年度 経営計画・評価計画 評価指標・評価規準						
区分	重点目標	目標実現のための方策	成果と課題	教員 肯定率	評価	評価
自分を大切に する	デジタルとリアルを融合した学習者中心の学びの保障	○子ども一人一人の特性や興味・関心に応じて子ども自身が進めていく学習活動を展開していきます。 ○多様な他者と協働した学びをとおして集中力・表現力を育成していきます。 ○日常の授業の中でタブレットと電子黒板を活用し、双方向を生かした児童主体の学習活動を展開していきます。 ○年間定期的に全学級においてオンライン授業もしくはオンライン学級活動を実施し、学びを止めない自立した学習者を育成していきます。	児童が学習ツール(ノート・タブレット)を状況に応じて使い分けられるようになった。地図計測アプリやAIドリルなどICTを活用した学習で、児童の理解や復習が個別対応できるようになった。ロイノートを使った意見共有や振り返りで双方向の学びができた。学習者が自分の学び方やペースを選択できる場面が増えた。学級閉鎖時のオンライン朝会など、ICT活用による学級活動の継続が可能となった。実技科目や調べ学習で、児童の成果を記録・共有するなど主体的な学びに活かされた。課題としてはICT機器の操作スキルに差があり、学習の進行に影響する場面がある。タブレットで学習以外の活動をする児童への対応が難しい。ICT活用の目的が教員によって曖昧な場合がある。デジタルを使う意義を明確化する必要がある。低学年では紙媒体の方がスムーズな場合があり、デジタル・リアルの使い分けが課題。提出や振り返りの定着度が紙より低く、習慣化が不十分。ロイノート以外のICTツール活用が限定的で、多様な学習形態への展開が難しい。	84%	4	4
	地域資源を活用した教育活動による地域の一員としての意識の向上	○校庭整備期間、東田中学校テニスコート、善福寺川緑地公園野球場、センター広場に加え杉二小前広場等を運動・外遊びの場として活用し、健康保持に努めていきます。 ○第6学年において東田中学校との交流(図書館交流、合唱コンクールリハの見学 授業体験等)、全学年において近隣の幼稚園、保育園、子供園との交流をより深めていきます。 ○外部(地域)人材や資源を活用した体験授業を実施していきます。	体育や生活科の授業で、杉二小前広場、センター広場、野球場など地域施設を活用できた。東田中学校との交流(図書館、合唱コンクールリハ見学、授業体験)により中学校生活のイメージが持てた。幼稚園・保育園との交流、町探検、地域人材の活用など、多様な体験学習が実施された。児童が地域に出ることを楽しみにしている様子が見られ、地域への関心や学校の一員としての意識が醸成された。AED訓練や出前授業など、地域との連携を通じた学びの場が提供された。課題としては、地域施設の利用計画に制約があり、予定通りの活動が難しい場合がある。幼保小交流は規模や感染症対策の関係で全員参加が難しい。活用できる地域資源や時間の制約があり、活動回数や内容の調整が必要。活動の成果を外部に発信・共有する工夫が十分でない場合がある。	100%	5	5
他者を大切に する	挨拶と言葉遣いをとおした規範意識と他者と共生する意識の育成	○登校時や全校朝会、学級活動をとおり、「時」と「場」に応じたあいさつ、相手を尊重する「さん」づけを徹底する共に、全教育活動をとおり発達段階に応じた温かな「言葉遣い」を指導していきます。	挨拶の習慣化が進み、児童から進んで挨拶する姿が増えた。「さん」づけや温かな言葉遣いの意識が高まりつつある。学級内や授業中の言葉遣いの指導は一定程度定着。児童会や日常指導を通じて、挨拶・言葉遣いへの意識が学校全体で育まれている。課題としては廊下や階段など授業外の場面で挨拶が不十分。高学年児童の言葉遣いにはばつきがある。受け手に伝わる「温かさ」を伴った言葉遣いが十分ではない。乱暴な発言や呼び捨てが見られる児童がいる。指導の二極化(定着している児童とそうでない児童)が見られる。継続的・全体的な指導と関係機関との連携が必要。	61%	3	4
	同学年・異学年によるボランティア活動や学校行事をとおりした自己効力感の醸成	○ふれあいウィークを中心に兄弟学年及び同学年での活動を学校でのあらゆる場で意図的・計画的に設定し、社会を形成していく上で必要な力を身に付けていきます。 ○「杉二運動の日 音楽の日」では児童一人一人が自ら考えたり、思いや考えを表現したり、判断したり行動したりする主体的な活動から「その子らしさ」が発揮できる集団作りを目指します。 ○青少年赤十字活動による地域清掃活動や募金活動を行い、自己効力感を高め、他者への共感力を育成します。	チーム担任制や学年・異学年交流を通じて、児童の主体性や自己効力感が育まれた。6年生のペアプロジェクトや異学年交流、運動の日・音楽の日での役割遂行で達成感を実感。青少年赤十字活動による地域清掃・募金活動で、地域貢献への意識が高まった。行事や活動を通して、計画・実行・振り返りの力や他者意識が養われた。課題としては活動後の生活場での継続活用や振り返りが十分でない。一部児童は主体的に取り組めず、個別フォローが必要。活動量や行事が多い中で、自己効力感醸成の機会を年間計画にどう組み込むか課題。学校全体での認識や意識の共有が薄く、地域活動や青少年赤十字活動の意義の理解が限定的な場合がある。	87%	4	4
	組織的ないじめや不登校の未然防止・早期発見・早期対応による安心・安全な学校生活の確立	○特別支援教室巡回教員、専門員、SC、特別支援コーディネーターと連携を図り、発達の特性に応じたきめ細やかな指導の充実を図っていきます。 ○各学級・学年での「いじめ」を認知し、早期発見・早期解決に向けた教育相談体制を強化していきます。 ○不登校支援員の活用と共に学校施設内に場を設定し、児童の居場所を確保していきます。 ○生活指導夕会で情報共有し、児童の問題行動は早期発見、未然に防ぐ共にSCの効果的な活用や関係機関との連携を図りながら児童の安心・安全を第一に行動をしていきます。	児童・教職員双方の「いじめ」に対する意識が高まり、早期発見・早期解決が進んだ。チーム担任制や教育相談体制の充実により、不登校児の安心できる居場所を確保。ふれあいアンケートやWEBQUを活用し、児童の実態把握や交友関係トラブルの早期防止が可能になった。日々の学年会や生活指導部会で、児童の変化を見逃さず迅速に対応できる体制が整った。児童が相談しやすい関係づくりが進み、相談行動が活性化。課題としてはWEBQUなどのツールをより有効活用する余地がある。学年団での情報共有に時間がかかり、部会の長時間化や負担が大きい。一人の教員が学級全体を十分に見られない時間があるため、組織的な情報共有が不可欠。情報共有の効率化や負担軽減の方法を検討する必要あり。	94%	4	4
学びを支えるチーム杉二	連携と分担によって地域を活かしながら児童の成長を支える教育の具現化	○HP(ホームページ)の充実やtetoruによる週1回の配信、学校公開や学校行事の公開による日常の「杉二小の教育活動の視覚化」をめざしていきます。 ○学校運営協議会をよりよい学校づくりの会議として位置付け、地域コーディネーターのコーディネートする体験型学習や、杉サポボランティアの授業支援等地域と教職員との連携・協働体制を確立していきます。	学校支援本部、杉サポ、地域コーディネーターとの連携が定着し、体験型学習や授業支援に協力を得られた。HPやtetoruで保護者への情報発信を行い、学校と家庭の連携を強化。学校運営協議会や意見交流会により、地域と教職員が協働して児童の成長を支える体制が整った。地域の協力によって、児童の安全確保や学習環境の充実が図れた。課題としては地域を活かした活動の量に偏りがある。協力者は任意での参加が多く、継続性や年度ごとの差が課題。個人情報への配慮や日程調整の難しさ。学校運営協議会や地域コーディネーターとの連携はまだ十分にできていない部分もある。	94%	4	4
	働きやすい環境の中で挑戦し続ける教師集団の育成	○会議・行事の見直しで、業務負担を軽減し、本当に必要な業務へと精選していきます。 ○外部人材やボランティアを活用することでより働きやすい環境を整えていきます。 ○チーム担任制・教科担任制をより充実させ、専門性の発揮と分担が進めていきます。	行事や会議の見直し、業務の軽減、外部人材・ボランティア活用により、教員が児童対応や教材研究に集中できる時間が増えた。チーム担任制・教科担任制により、授業や学年運営のフォロー体制が充実。教員同士の情報共有や指導方法の学びの機会が確保され、互いを補い合う環境が整った。管理職の声掛けやサポートにより、精神的に働きやすい環境が構築されつつある。課題としてはチーム担任制による打ち合わせや情報共有に時間がかかり、多忙時には勤務時間内での業務調整が難しい。精神的負担は軽減される一方、物理的負担は十分に軽減されていない場合がある。若手教員の育成や負担分散、勤務時間内での効率化に改善余地がある。ライフワークバランスの整備や行事・業務のさらなる効率化が必要。	84%	4	4